

シックハウスの経験から室内環境学会に参加

河島 裕子（シニア会員）

かつて、シックハウスについて何も知りませんでした。

平成11年4月、新築集合住宅に入居し、体調不良を感じつつ過ごしていました。9月東北ドライブからの帰路、当時は東京が近づくとその上空が薄墨色の層に覆われて見えました。そして都内に入ると気分が悪くなってきました。そこではじめて体調不良は空気が原因ではないかと疑いました。医学・衛生関係の文献を探し読んでみて、シックハウスに違いないと考えました。知人の岸秀子氏(エルグ研究会)に相談し、呂俊民氏・関根嘉香氏を紹介されました。呂氏よりエアサンプラを借出しHCHO濃度を測定しました。関根先生から日立化成やナショナルの活性炭の空気清浄機を紹介して頂き、各部屋に2台ずつ設置利用しました。活性炭フィルターもたびたび交換しました。玄関にはルーバードアを入れ換気も最大限に注意しました。

平成12年、体調不良・発疹のため北里研究所病院アレルギー科科学物質過敏症外来を受診し、石川哲医師より国立医薬品食品衛生研究所を紹介され、空気検査を申し込みましたが、残念ながら実施されませんでした。平成13年夏も検査を申し込み、予定はされましたが測定にはいたりませんでした。体調は改善されつつありましたが、精神的不安は計り知れないものでした。

平成13年12月、室内環境学会(北とぴあ)に出席し、測定関連会社の展示なども見学し、シックハウスの測定がいろいろあることを知りました。関根先生に相談し、幸いに測定して頂けることになりました。やっと先が見えてきた思いでした。平成14年3月、5月、8月、10月と4回の測定をして頂き、家の中の空気状況が判ってきました。測定の結果は平成11年エアサンプラ測定に比較し改善されていました。それでも季節・場所など生活上の注意点があることが判りました。

以来、室内環境について考えるようになり、学会にはなるべく出席しています。発表論文と環境改善のための新製品の開発に関心強く、毎年期待しています。

揮発性有機化合物の室内濃度指針値は、平成9年にホルムアルデヒド、平成12年にトルエン等7物質、平成13年にテトラデカン等3物質、平成14年にアセトアルデヒド等2物質が設定されました。私の場合、

入居が平成11年、建築完了は平成10年、バブル時期に計画され、バブルがはじけた後に建築され、指針値の定めに先行し、まことにタイミングが悪かったようです。指針値が定められても、その後も幼稚園や学校校舎のシックハウスのニュース等の報道がありました。

身体・神経に異常を感じた者としては、素人が簡単にチェックする方法を期待しますが簡単なものはなかなかないと思います。最近では建築者も入居者も困ることがないのかもしれませんが、室内の空気は外気にも影響されます。朝より夕方、夕方より夜中の頃いやな空気が入って来るように感じます。北風と南風でも室内の空気は異なります。

自宅から南東250 mに中央高速(地上道)が有り、近くに平成32年までに東京外かく環状道路(地下道)が建設され、ほぼ東700 mに中央ジャンクション(仮称)の建設が決まっています。地下道のため排気筒が2ヶ所予定されています。説明書によると「トンネル内では、電気集じん機やジェットファンで環境保全対策を行います。換気所から排出する空気は、除じん装置により煤じんを極力除去し、十分な排気上昇高さを確保した上で、上空へと拡散させます。排気所から排出される二酸化窒素(NO₂)や浮遊粒子状物質(SPM)の地表付近への影響は環境基準値の数百分の一以下です」と説明されています。排出塔の高さは未だ決定していないとのこと。果たして影響はないのでしょうか。

英国の劇作家バーナード・ショーは「科学は一つの問題を解決するのに、いつも十の問題を新たに作り出す」と喝破したとのこと。先日、TVでThe History of Our World in 18 minutes; Big History Projectという番組を見ました。地球138億年の歴史です。物事・世の中が「複雑＝もろさ」にむかっているようです。飲む水をボトルで買い、エネルギーのガス・電気を買い、自然の風ではなく冷房暖房を用い、温暖化による空の異変、そして今や放射線により土地を失うところまで来てしまいました。地球の科学歴史の転換点なのかもしれません。生物は化学反応の塊で、複雑化した生物の主人公はDNAか?などと考えこむこの頃です。

良好な自然環境の保持と安全な室内環境の保持を室内環境学会に期待しています。